

紙とデジタル

千葉大学教育学部特任教授 あまがさ しげる 天笠 茂

1 間に合わなかったGIGAスクール構想

ICT環境の整備、デジタル環境の一層の促進を目指す予算的措置が図られるなかで、2019（令和元）年12月19日、羽生田光一文部科学大臣より、「子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育ICT環境の実現に向けて～令和時代のスタンダードとしての1人1台端末環境～」とのメッセージが発せられた。

いわゆるGIGA（ギガ）スクール構想といわれるもので、1人1台の端末と高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備するための経費が令和元年度補正予算案に盛り込まれたことにとまなうものであった。

しかし、構想の実現に向けてアクセルを踏もうとしたその時、新型コロナウイルス感染症の拡大があり、3月以降の臨時休業の要請に伴う学習支援には間に合わなかった。

末尾の表は、文部科学省が各自治体に対して、臨時休業中の家庭学習について調査した、「新型コロナウイルス感染症対策のための学校の臨時休業に関連した公立学校における学習指導等の取組状況について」の結果（2020（令和2）年4月16日時点の調査）である。「同時双方向のオンライン指導を通じた家庭学習」は5%という数値が、デジタル環境整備の遅れを象徴するものとして、いくつかのメディアにも取り上げられた。

この間、休校中の家庭における学習に係る報道のほぼすべてが、オンラインによる授業の様子であって、多くの親子は自分たちの置

かれている環境との相違を強く感じながら、その種の報道に接していたに違いない。

確かに、デジタルに関わる環境の整備が、多くの市町村にとって喫緊の課題であることを白日の下に晒したのが、このたびの事態であった。先の大臣メッセージには、1人1台端末と高速通信ネットワーク環境の実現には、「各自治体の首長の皆様のリーダーシップが不可欠です。」とあり、それに続き、“この機を絶対に逃すことなく”と、再度、各自治体の首長に対して実現への取組を促している。

“教育立県ちば”を標榜する千葉県にとってもデジタル環境の整備は他人事ではない。市町村間のデジタル格差の解消を図り、全体の水準を引き上げていくことが喫緊の課題ということになる。デジタル環境の整備に向けて、県及び各市町村の動きに注目したい。

2 紙の教材が休校中の学習を支えている

もっとも、デジタル環境の整備を推進するにしても、バランスを大切にしたい。紙の存在である。教材としての紙の持つ力とその存在感についてである。

先に取り上げた文部科学省の調査は、紙による教材が臨時休業中の子供たちの学習を支えていることを明らかにしている。デジタル環境の整備が間に合わなかった状況の中で、紙の教材が、子供たちの学習保障に貢献したことを確認しておきたい。

その意味で、学校にとって、臨時休業中、子供たちへの学習を保障する立場から、自ら

有する学習に係る資源をどのように捉え、それらをいかに活用したか見つめてほしい。不自由な状況下、持てる資源を使い切ったか、それとも、眠らせたままにせざるを得なかったか、チェックが求められる。

その多々ある学習に係る資源のうち、“紙”を代表するものとして図書室の図書がある。それが、休校中の子供たちの学習を支える学習材としてあったか否か。

文部科学省「新型コロナウイルス感染症対策のために小学校、中学校、高等学校等において臨時休業を行う場合の学習の保障等について」（通知）（令和2年4月21日）は、学校図書館についても次のように言及している。「感染症対策を徹底した上で、例えば、分散登校日を活用したり、時間帯を決めたりして貸出を行うなどの工夫を図ること。」と。

一冊一冊が、子供たちの学習を支える貴重な資源であることを改めて確認するとともに、その活用を分けているものが何であるのか、検証が望まれる。

3 紙もデジタルも

改めて、デジタル環境の整備について、その取組は、紙に取って替わることを目指してなされるものでないことを強調しておきたい。

いずれはデジタルが紙に取って替わる。現在は、その過渡的な段階にある。このような捉え方をしている人も少なくない。

しかし、“紙かデジタルか”と二者択一の話にしてしまうことは避けたい。

「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議がまとめた「最終まとめ」（平成28年12月）には、次のような一節がある。

「デジタル教科書が、紙の教科書とともに学校現場で使用されることを通じて、紙とデジタルが融合した新たな授業風景や学級経営

が生まれ、次期学習指導要領の実施と合わせて、授業研究や指導計画の充実や見直しのきっかけに結びついていくことを期待するものである（以下略）。」

紙のみでというのも、また、デジタル一本槍というのも、それぞれ幅の狭さを感じてしまう。デジタルを使いこなしつつ紙との併用を図り、授業設計の幅を広げる。学習のねらいや内容によって用いる材料や手法を選択していく。そんな幅広の教材開発力を備えた授業力を有する教師は、紙もデジタルもという学校文化に生まれ、育っていくことになる。

まさに、紙に取って替わるものとしてのデジタルがあるとするか。それとも、“紙もデジタルも”とするか。岐路に立っているのが今の学校である。“これまでの実践とICTとのベストミックス”とは、先の大臣メッセージの一節である。コロナ後の授業風景について、その多くはデジタル環境の整備の進め方にかかっているといってもよい。

表 臨時休業中の家庭学習（単位：設置者数）

	回答数	割合
教科書や紙の教材を活用した家庭学習	1213	100%
テレビ放送を活用した家庭学習	288	24%
教育委員会が独自に作成した授業動画を活用した家庭学習	118	10%
上記以外のデジタル教科書やデジタル教材を活用した家庭学習	353	29%
同時双方向型のオンライン指導を通じた家庭学習	60	5%
その他	145	12%

（*）複数回答あり。

（*）割合は、臨時休業を実施する設置者のうち、各項目に該当する家庭学習を課す方針であると回答したものの割合。